

学習形態 総論的に講義。のち各論的座談。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

『行巻』について

○第一に「行」とは何か。通仏教でいわれる修行的概念と同等なのであろうか。同等であるならば、行とは、「教」が示す内容を実践していき「証」を得るという行程パターンを意味してくる。

それならば、文頭に「真実行を顕わさば」と述べるべきであろう。にも拘わらず、先に戻って「往相回向を案ずる」と述べてくるのは、どういう意味になるのであろう。

○もう一つ。この「行巻」には撰号がない〔西本にはあり〕ことも何か意味しているのか。普通は「行」は「われ」が主体になるべき事柄であるから、むしろ宗祖の名を明記してしかるべきであろう。

○そして、標挙の文に第 17 願が置かれ、その下に浄土真実の行、選択本願の行と述べられている。つまり願が行になっている、ということである。

○そういう事象を念頭に置きながら、考えてみたいと思う。

課題 11 「行」の概念について

○通常、行と言え、覚りを得るための方法的行為であり、その行為の結果において目的が達成される。従って「行」と「証」との連結関係になってしかるべきである。即ち、教えを行じて証を得る、という至って一般的な行程である。

ところが、英文を見ると、通常は、行を「training、ascitic」となるべきところを「Living」と訳されている。前者は修行という限定的な行為に対して、後者は、一生涯を示している。そうなれば、「証」は実現できないことになる。

このことを理解するに、『後序』の文に出てくる「行証久しく廃れ」と「証道今盛りなり」に相對するのではないか。前者はそのまま「行証」後者は「証道」に充当すると考えられるのではないか。

そうであるならば、『行巻』の「行」は証道の「行」として捉え直さなければならぬ。

すなわち、前者は行為であるのに対して、後者は行程として見られている。行程とは「道」である。

「行」の概念の転換

○従来に行の構造として、行と証の連結関係であったが、新たな行の概念を設けるにあたり、連結関係という視点で見ると、行において「教」と「証」との

『教行信証』学習会

連結関係を指摘しておかなければならない。〔正信偈には、真宗教証興辺州〕

「佛の名を称する」という行において、「教」に述べられている「佛佛相念」と「証」における「弥陀如来は種々の身を示し現したもう」という、教の「佛と佛との出会い」と証の「佛の化身の衆生との出会い」がリンクしてくるのである。（教巻のところをもう一度見直していただきたい。）

○いろんな人々との出会いが仏との出会いになってくる、ということは、特別な空間ではなく、現実空間、まさに普段の生活空間において成立するのである。

「名を称する」のはだれか。

○それでは、願文を丁寧に見てみよう。p 157

○願文に言われる通り、阿弥陀の名を称するのは「十方世界の無量の諸仏」である。すなわち、この「行」たる無碍光如来の名を称するのは十方の諸仏である。したがって我々凡夫が称するのではないことになる。

されば、その十方諸仏とはだれか。先に『教』の佛佛相念と『証』の種々の身がリンクしてくる、と述べたが、その原理は、『教』と『証』の間にある『行』と『信』が説かれなければならない。その『行』においての称名の主体が十方諸仏である。それでは『信』の主体はだれか。その願文を見ると、「十方の衆生、乃至十念せん」と出てくる。つまり主体は「十方衆生」であり、その行為は「乃至十念」ということになってくる。ここで称名と十念の相違は出てくるものの、その相違は仏と衆生であることの相違でしかない。

○『行』の文頭で「往相回向を案ずるに大行あり、大信あり」と行と信がセットで述べられていることは、行と信は不可分であることを述べている。そう考えると、さきに述べた十方諸仏と十方衆生とは無関係ではなく、むしろ同一ではないだろうか。

言うなれば、阿弥陀から見れば、名を称する衆生が仏に見えていることを意味しているのであろう。そうであれば、十方衆生の我らが、諸仏として無碍光仏の名を称えさせていただく、ということになるわけです。このことが、真宗の教証を示しているのです。

『正信偈』の意味するところ。

○正式名称は「正信念仏偈」ですが、これをどう読むんですかね。難しいところですが、「行巻」にあるわけですから、念佛に力点があるのでしょうか。そうすると、「正信の念佛偈」となりますか。では、何故正信と言えるのか。

正信偈を見てみますと「信じなさい」という言葉が二ヶ所出てまいります。

「応信如来如実言」と最後の「唯可信斯高僧説」ですね。これは第一回目にも申しましたが、まえの信は「教巻」の課題、「如是の義」ということです。そして最後は、「証巻」。「如より来生して種々の身を現す」ということ。

すなわち『正信偈』は教一証がつながっていることを明確にしている偈文であるといえます。したがって結論を言うならば、七高僧は如来の化身（諸仏）であり、諸仏が如来を讃嘆している、ということになり、これが17願の願成就

『教行信証』学習会

の姿である、といたいのではないかと思います。

課題 12「大行とは無碍光如来の名を称する」というテーゼを掲げているが、「名を称する」ということが、(従来)の行になりうるか。あるいは「無碍光如来の名」というところにその意味があるのか。

『教巻』において佛佛相念の理法が説かれてきたが、その理法が現実に起こったということが『教巻』の意味であった。その阿難の姿は、『証巻』に述べられる「阿弥陀如来は如より来生して、報・応・化種々の身」という阿弥陀の化身の姿として捉えることになり、教一証のつながりが明確にされている訳である。余宗においては行一証の関係だが、我が宗においては、教一証の関係になっていることを示した。

それでは、教一証の間にある行一信はどういう意味があるのか。従果向因の法をもって説明していきたい。

そもそも、仏道修行というのは、教を信じ、それを行じて証を得る、という「教行信証」という展開が従来であった。これを従因向果という。

これに対して、如来が衆生を教化引導するために因位にさかのぼることを「従果向因」と言われる。これは自然の摂理・流れに逆行している。これをどう考えるか。我々にとってこれは**重大な意味を持っている**のである。

この時間の流れに逆行するという事は、簡単に言ってしまうと、こうなった結果に対しての原因追及に他ならない。このことを如来にしてみれば、救済の原理の表現なのである。

さて、「名を称する」について考えてみよう。この「名を称する」はどこから来たか、と言え、言うまでもなく第 17 願から来たものである。ということは、名を称するのは「十方世界の無量の諸仏」である。この無量の諸仏とは一体誰のことなのか。

ここで 17 願から 18 願に展開していくと、「十方衆生が乃至十念する」と述べられる。今丁寧に本願論を述べることはできないが、48 願が全く無造作に配置されているのではない。この配列にも大事な意味を持っていると考える。

そうすると、文頭に「大行あり、大信あり」ということから、17 願・18 願の 2 願が並べて意味を成していると考えられるべきであろう。つまりこの 2 願をくっ付けてみるとどう読めるか、ということです。そうすれば、「十方無量の諸仏」と「十方衆生」の関係をどう考えるか。どちらも無量ですから、別の人ではない。(別の人ならば無量とはならない)すなわち十方衆生が十方諸仏になった、とみるべきであろう。

そう考えると、17 願 18 願の流れは、諸仏から衆生へという流れだ。すなわ

『教行信証』学習会

ち従果向因である。いうならば、我々衆生が仏になる原理・道理を示している内容としてみるができるのである。

したがって、「名を称える」ことが行であることの証明である。

次に、我々は、「南無阿弥陀仏」というように阿弥陀仏の名を称しているが、ここで「無碍光如来」の名、されている。その意図はなにか。いうまでもなく、『浄土論』の「尽十方無碍光如来」からくる言葉であるが、なぜこの名なのか。その成就文を見ると、「無量寿佛の威神功德の不可思議なるを、讚嘆する」ところにある。この威神力は「尽十方無碍」というところにあるのではないか。

そうであるならば、この「尽十方無碍」はいかなる意味を持つのか。

先ほどから述べている従果向因の如来のことで述べるならば、十方諸仏から十方衆生へと「十方を尽くす」ところの如来の威神力を示すのもであり、「十方を尽くすことにおいて発見されてくる「唯除」に対する「無碍」なのであろう。「唯除」は碍である。でも「碍は衆生にあり」とされるのであり、その「唯除」の救済を担うことにおける「無碍」なのである。

ここに「尽十方無碍光如来」でなければならない理由が浮かび上がる。

○ここで確認しておかなければならないことがある。これは、行であっても我々衆生が修する行ではない。如来が修するところの行なのである。すなわち、我々衆生においては、行は道のり（道程）ではない。『後序』の文に「証道」と出てくるが、これは生涯を道とするわけです。ですからこの行を「海」と表現していきます。

ですから、この巻では「海」を中心として論が展開されていきます。そして結論としてp 198「願海は二乗雑善の死骸を宿さず、人天の虚仮邪偽・雑毒雑心の死骸を宿さず」というところに行き着くのであります。

そして現実、我々の在り方として「比較対論」として示してくださっている訳です。

学習形態 総論的に講義。のち各論的座談。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

『信巻』について

はじめに：（問い四つの説明）特にこの『信巻』はほかの巻と異なっているので、読んでいく上での疑問点を少し上げて、思考していくとつかかりになれば、と思います。

課題 1 3

まず第一に考えなければならないことは、この『信巻』の存在意義である。その一つは『行巻』で述べてきた、行信一体の原理がまずあるわけです。

1、行巻の文頭に「大行あり、大信あり」（p157）とある。

2、行の十方諸仏から信の十方衆生へという従果向因の法則を示すものであった

しかし、それだけにとどまるならば、自然の流れで信巻が出てくるので、わざわざ序文を書く必要はない。上記に述べた内容のほかに、新たに『信巻』から始まる理由がなければ、ここに『序』をつける意味はない。したがってここにもう一つの課題があることを暗示していると読み取れるわけです。それは何か。

そのもう一つの課題の『信巻』の始まりは、「悉知義の文」（p209）より始まると考えています。この文はどういう意味を持つのか、それを明確にすることによって、もう一つの『信巻』が浮き彫りになってくると思います。この文に対してはいろんな議論がありますが、私は、その文が示す「慚愧なし」という問題が親鸞聖人の現実課題として、願文の「唯除」の問題を展開していくもう一つの内容が読み取れるのである。

そもそも、「唯除」とは何か。それは十方衆生を救済せんとする本願が、除いてしまっている衆生があったという法蔵菩薩の発見なのだ。この「唯」に意味がある。「唯だ除く」と。理由があって除いたのではない、わけもなく除かれた、という意味を持っている。理由もなく排除されていた人々の発見は、この十八願が本願の中の本願、本願の尊厳性を示していると思います。その如来の本願は、我々においては、救われ難い我々の問題であり、実は「救われ難い自分」に気付かない問題なのだ。

これもまた、従果向因の法則で阿弥陀如来から法蔵菩薩へと向かい、今度はそれに取り残された者たちへの具体的救済の始まりが展開されていく、と意味をもっていると了解している。それが、17「諸仏称名の願」から18「至心信楽の願」へと展開してくる流れであり、行巻で「尽十方無碍」と名告る意味があったのだ。「十方を尽くす」とは「十方衆生」のこと。十方衆生を見尽くす、探しつくすということであろう。「無碍」とは曇鸞の『論註』に「碍は衆生に属す。光の碍には非ざるなり」（聖全p283）と積されている。親鸞はこの文章は引用されていませんが、『行巻』（p194）に「道は無碍道なり」「十方無碍人」「無碍は、いわく、生死即涅槃と知るなり。かくのごとき等の入不二の法門は無碍の相な

『教行信証』学習会

り」と碍の問題が衆生にあることを示している。碍の衆生が無碍の衆生になっていく。それが無碍道であり、十方無碍人といわれるところであろう。

此のことが、まさに「悉知義の文」に「救われ難い者」の現実的具体例として、宗祖の心にとりついていたのであろう。つまり、「愁惱なし」という姿に「碍」を見たに違いない。

この『信巻』は「行信」という教証を明らかにする役目を担うものとしての一面と、17願から18願への従果向因の如来の発見である「唯除」の展開の始まりであることを述べようとしているのである。

まず、「悉知義の文」ですが、この一文は『信巻』の（p255）にありますから、見ていただきますと、「. . .」。ここに「一として王の愁惱を生ずる者なし」とあります。

親鸞はこの（罪を犯しながら）愁惱が生じない人間の問題を取り上げようとされたのではないかと思っています。

如来は、「唯だ除かれた人々」を発見された。それは親鸞聖人にとっては、民衆が苦悩に苦しみ次々と死んでいっている現実を見ながら、平然と生きている人々と重なり合っただけに見えるのではないかと思います。

親鸞にとっては、これが本願が自分を招喚してきた勅命であったのだ、と。この本願は18願であることは間違いないが、もちろん勅命は「乃至十念せん」ということになり、諸仏称名という17願に実証されているという流れになっていく、というのが一般的に考えられることであるが、もう一つは「唯除を明らかにせよ」と。阿弥陀仏に「帰命する」ということは、阿弥陀仏が見出した「唯除」を引き受けるということなのでしょう。

そういう意味において、この『信巻』は、大きく二段に分けることができます。（p242）「一心すなわち金剛真心の義、答え竟りぬ。知るべし」と結ばれていますね。

次の「追釈」と言われているところ。なぜ菩提心積から始まるのでしょうか。そして「横超断四流」ですね。「断」。そして、「仏弟子」の問題。

これは、総じて大乘菩薩道を言わんとしているのではないかと思います。言うなれば、この「真仏弟子積」の後に33願・34願が配置されている、此のことは本願に基づいて始まっていくということである。即ち、「行」・「信」・「証」はきちんと願文によって展開されています。それと同等の意味合いを持っている、ということでしょう。

そして悲嘆述懐。そして難治の三機。これらの流れは、「唯除」より発していることは明白であります。

今、教行信証を考えるに、本道には、凡夫往生、凡夫救済の道であるが、実は裏には大乘菩薩道の道が述べられている。その転回点が、「安楽浄土に生まれんと願ずる者は、要^{かなら}ず無上菩提心を発するなり」（p237）という言葉にあるんでしょう。そのことを往相回向と還相回向で表現されているわけです。簡単に言ってしまうと、浄土真宗こそ大乘菩薩道の真の仏教である、というわけです。

さて、話をもとに戻しますが、「教」は佛佛相念ということでした。これが、「出世の大事」、簡単に言えば生まれてきた意味のことです。したがって、佛と佛とが念じ合っ

生きていくというのが人間の生きる意味。それが「行」。生活です。

「行」というのは、無碍光如来の名を称する、ということです。その名を称すれば、「衆生の一切の無明を破し、衆生の一切の志願を満たす」と言われています。それは佛佛相念の働きです。したがって、真宗の教えは、「念仏成仏これ真宗」ということに尽きるわけです。

しかし、親鸞聖人の真宗はそこにとどまらなかった。その理由が三つある。

- 一、如来（法蔵菩薩）が「唯除」を発見したこと。
- 二、曇鸞大師（鸞菩薩）が「称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざる」ことを自ら実感されてこと。
- 三、親鸞が（現実の中に）「愁惱する人一人もなし」ということに悲嘆したこと。

この三つによって『信巻』が開かれていくのであるが、この中の二と三は、親鸞聖人自身の課題なのである。この三つをもって『信巻』の二重性を述べてきたわけである。

課題 1 4

それでは、『別序』に触れていきたいと思う。

まず文頭、「それ以みれば」から始まっています。『総序』は「竊かに以みれば」から始まっています。そして次に「科文」でいえば「二尊の大悲」となっていますように、信心は釈迦・弥陀によることを述べています。で、『信巻』の内容で言いますと、『観経』の「回向発願心」のところで言われてきます。ところが、ここでは「信楽」というように『大経』の三信の信楽ですし、真心も至心のことですから『大経』の三信です。ここに『観経』の三心と『大経』の三信とを結びつけている意図があるように感じます。このことは本文に入っていくと明白になっていきます。

また、この「信楽」という言葉が突然出てきたように思いますが、これは、『行巻』の「おおよそ誓願について・・・」（p203）のくだりを受けて述べられている、と推察することができます。つまり、『行巻』から繋がっているわけですので、それを受けて「夫れ以見れば」と述べているのだらうと思われます。

次に「末代の道俗・近世の宗師・・・」にいりますが、『総序』では、釈迦の時代の現実でした。ここでは親鸞聖人の時代の現実です。「末代の道俗」その当時の人々。その人々たちの考えが自性唯心ということでしょう。そして「近世の宗師」とは浄土宗の人々を指している、というのが通説です。それに対して親鸞聖人は「この際、真の仏教をはっきりさせよう」とされたわけです。

しかしこれはあくまで「末代の道俗と近世の宗師」に対してであって、民衆に向かっては、「仏恩深重なるを念じて嗚言には恥じない」姿であった。そして「毀謗を生ずるなかれ」と呼びかけられている。

『総序』では、「もし、またこのたび疑網に覆蔽せられるならば」と述べられている。この二つを並べてみると、我々の不信心の変化が見えてくるようである。最初のわずかな疑いからその疑いが網のようになって我々を覆っていく。そこで自分の思いで取捨選択すればいいものを、相手に対して毀謗（裏でも表でも相手を悪く言う）してしまう結果にな

っていく、という心情の変化が読み取れます。この問題は、悉知義の「愁惱無き」という問題につながっていくような気がしています。

さて、次に『標挙の文』ですが、18願と機が述べられています。この標挙の文を教・行・証を見るにそれぞれ、「本願（大経）によって、浄土真宗を・行を・往生を顕わす」という具合に述べられています。その流れでいえば、「真実信心を」となるように思いますが、（正定聚の）機を顕わす、という表現になっている。これをどう了解するか。

「機」という以上人間を指します。つまり正定聚の人間を顕わす、ということになります。そうしますと、その人間を示しているのは、『信巻』の後半の部分に重心があるということの意味してくるのではないのでしょうか。言うなれば、五逆・謗法も人間の問題です。

このようにみてきますと、信心と人間の関係が問題になってきます。これまで信心というのは、人間が何かを信じる、という作用を言ってきたのであるが、この『信巻』では信心が人間を正定聚に住させるか不定聚にするか邪定聚にするか、という主客が逆転しているのではないか、と思わせてくる。

ところで、その「正定聚」はどこに出ているかといえば、『行巻』ですね。（p190）ここに「真実の行信に帰命する」というキーワードにおいて、「歓喜地」とか「他力」とか「念仏成仏これ真宗」などといわれている。それが「正定聚」に住するという事。しかも「十方群生海」と人間が示されている。

それから、それと『化身土巻』の標挙の文には、願文の下に、「〇〇定聚の機」と「〇〇往生」と並列されていますが、『信巻』では「〇〇定聚の機」のみで「難思義往生」は『証巻』に標記されている。『証巻』の11願には「国中の入天、定聚に住し、必ず滅度に至る」とされている。

そうすると、正定聚の機は浄土の入天、ということになってくる。そのためには、十方衆生、浄土に生まれんと願う、ということがその前提にある。その18願に正定聚の機とするのは、18願は浄土に生まれることが目的ではなく、正定聚に住するのが目的である、ということをも物語っているのではないか。その正定聚については、『証巻』の「利行満足」（p296）還相回向の部分に出てまいります。ここに、『信巻』から『証巻』へという流れが示されていると思われまます。

したがって、この『信巻』は第18願によって信心を顕かにするのではなく、第18願によって人間の正定聚に住すことを顕かにしている、ということである。考えてみれば、『教巻』は人間と人間が念じ合うこと、『行巻』は人間の念じ合う生活、そして『信巻』は人間の生活は正定聚に住することを目的としている、というごく自然な流れとして見えてくるのではないかと思われまます。

課題 15

さて、本文に入るわけですが、丁寧に読んでいけばいいんですが、そういう時間もないので、ざっくりと行きますと、まず、御自釈がありまして、そのあと、願文が出てまいります。その願文にも成就文にも「唯除」がある、と。

それから、（p213）「称名憶念あれども」という曇鸞の問いが出てくるわけです。それで、曇鸞自ら答えられて、「如来の実相身、為物身」と「三不相応」が説かれます。

それから大事なものは、「序文義」。「苦を受けざる者」と出てきます。これは誰を指す

『教行信証』学習会

のか。そして『観経』の「三心」が述べられていくわけですね。

そのあと「慚愧」が出てきます。

そして結釈に「行・信、すべて阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したもう所である。この因なくして他の因があるはずがない。」ということが言われる。

これまでの流れから、『大経』の三信が見出せるか。私も確実には読み切ってはいないんですけど、このキーワードは「回向」でしょう。おもしろいのは、(p 214)曇鸞は「至心の者回向したまえり」と述べていますね。ふつうは「至心に」です。しかも「者」という字をわざわざつけている。

課題 16

これは、前の課題と関係してくるのですが、天親の一心は、『行巻』の「尽十方無碍光如来」につながるわけです。そうしますと、17 願から 18 願への展開が必要になってきます。そんなところを念頭に置きながら「三一問答」を読んでいってみてください。